

檸檬の棘

黒木渚

ふと目を覚ますと、ベッドルームの床に父の頭が転がっていた。

「怖い」と思うまえに、どん、と心臓が脈打って反射的に飛び起きる。私の叫び声は真夜中の鉄筋コンクリートに打ち返されて耳鳴りのようにしばらく響いた。

頭だけになった父は、暗がりの奥から虚ろにこちらを見ている。大人の頭にしては一回り小さいような気もするが、そういうえば癌も末期になると酷く痩せると聞いたことがある。突き出した頬骨と落ち窪んだ目。父の死に顔だった。

しかし、暗闇に目が慣れて気付く。それは寝苦しさから自分で蹴落としたブランケットだった。丸いコブを作って床に落ちているものだからこんな錯覚をしてしまったのだ。

思い違いが分かってなおさら怖くなる。幻覚でも本物でも、誰の生首が転がっていても構わない。だが、それが父であることは許されない。それは私の敗北を意味するからだ。

わざわざ父の葬式をすっぱかして焼肉屋へ行き、父の死、父の存在などというくだらないテーマを捨てて豪快に肉を食べ酒を飲み、ただ気持ちよく生きている私は乱れずに進んでこそ美しい。健やかな眠りを父の幻覚に妨げられ、もしかし

てこれが罪悪感だろうかと思ひ悩むくらいなら、自然の成り行きになど任せずにさっさと殺しに行けば良かったのだ。

我々が戸籍上の他人となつてから実に十年の歳月が過ぎていた。その間、私達に再会の機会は無く、互いに電話のひとも寄越さない絶縁状態だった。

私は、全ての役割を放棄してよそへ逃げて行つた父を徹底的に拒絶しようと決めていた。改心を望んだり、罪を償つて欲しいとも思わなかつた。

むしろ、父としても大人としても満足に機能しなかつた情けないあの男が、この世界のどこかで性懲りもなく酒を飲み、女を口説いていればいいと思つた。そうして酩酊の中でうっかり受精し、生まれてきた子供をまた裏切るのだ。傷ついた子供はやがて私と同じように父を呪うだろう。父にはそういう腐敗した渦の中に生き続けていて欲しかつた。

しかし父は珍しくもない病氣であっけなく逝つた。末期癌であることを親戚づてに聞いたのは、死の一ヶ月前。積極的な治療はもう意味がないと緩和ケアに入っていることを知つた。

私はなぜか、恨み続ける限り当然父は生きているものだと思つていた。それは想像力の欠如から引き起こされた、ただの思い込みである。そうだった、人間とはこうしてランダムに選ばれて平等に死ぬのだ。

会いに行け、と色んな人に言われた。親戚にも友人にも恋

人にも、とにかく、状況を知っている全ての人が、生きていくうちに会いに行けと言った。彼らは、父のためではなく私自身のためにも行くべきだと熱心に説明してくれたが、そういう典型的な後悔が自分に訪れるのだろうかと思議に思つた。

そもそも父の死を確かめに行くことは危険だ。うかつに同情などしてしまつたらどうする。この世界の何処かでのうとうと生きている父親を軽蔑することによつてのみ、今日まで生きながらえてきたのに。

私はこの瞬間も父が無意味なサイクルを繰り返しているのだと思うと気持ち安定した。あの人は蜂蜜の中で溺れるアリだ。馬鹿で強欲でどうしようもない。私の可愛いお父さん。いつか、最後の愛情を振り絞つてとどめを刺しに行こう。その日がくるまで、この強烈な怒りを抱えて美しく生きてゆこうと誓つた。

私は自分の中にある殺意が愛しかつた。それさえあれば誰よりも強い動機で生きている特別な女の子になれたからだ。誰にも分からない私だけの不幸。分かつてたまるかと叫ぶ私を誰もが賛美せずにはいられなかつた。その真正銘の怒りこそが才能だからだ。

私はいつも窒息しそうな憎しみを抱いて歩きながら、実はその輝きに助けられもしていた。だから、怒れる少女として成長している間も、酒蔵の杜氏のように樽の中の憎悪を守り

抜いてきた。濃度を、香りを、温度を変えないようにと、春のすべてを費やして樽の中を見張っていたのである。熟成した私の怒りは、皆の官能を揺さぶる素晴らしい出来だったから、私はこれまで自分の生き方を肯定することができた。それなのに、父は自分の命を人質にして一番卑怯な方法で死んでいった。全部台無しだ。

ベッドから起きだして台所へ向かう。ついでに床に転がっていた父の頭を蹴飛ばした。私に向けられた物憂げな視線が崩れる瞬間、父の声ですまん、と聞こえた気がしたが知らないふりをした。

頭の中では、幼い自分の声や、ヒソヒソと囁く同級生達の声、かつての恋人や教師や常連達、母や弟の声が不明瞭に飛び交っている。正気とはなんと鬱陶しい。

ゾルピデムという悪魔じみた名前の薬をシートから一粒押し出して掌に乗せた。白くて小さい錠剤はレモンの種に似ていると思う。